

日琉諸語におけるコピュラと格助詞生起の方言差について

2022（令和4）年入学

福島孝太

言語学・応用言語学専門分野

2026（令和8）年1月提出

概要

本研究の目的は、日琉諸語におけるコピュラと格助詞生起の方言差について、その関連性を検証することである。白岩・平塚・酒井(2016)では、格成分としての名詞句が無助詞になりにくい方言ほど述語としての名詞句がコピュラによる標示を必要としないという可能性が示唆されていた。これは、格標示とコピュラ標示の間に経済性の原則が成り立っているという仮定に基づく。経済性の原則とは、最小限の労力で最大限の情報を伝達しようとする傾向のことで、名詞述語文において格成分としての名詞句に助詞が伴っている場合、述語としての名詞句は語末にコピュラが生起しなくとも述語として解釈されやすくなるため、コピュラの生起が抑制される可能性が考えられるということである。

『DDJD_全国方言談話データベース統合版』をもとに、各地点の方言談話における格助詞の生起と名詞句が述語になった場合のコピュラの生起について調査を行った。

その結果、日本の各地点の方言に経済性の原則が適用されていない可能性が高く、コピュラの生起の方言差と格助詞生起の方言差の間には明確な関連性があるとはいえないことが明らかになった。

目次

1 はじめに	4
2 先行研究	4
2-1 コピュラについて	4
2-2 項の役割標示について	7
2-3 問題点	10
3 調査手法	11
4 調査結果	14
4-1 コピュラの生起	14
4-2 格助詞の生起	17
4-3 コピュラ生起の方言差と格助詞生起の方言差	21
5 相関関係の検証	23
5-1 コピュラの生起率（終助詞なし）と格助詞全体の生起率	23
5-2 コピュラの生起率と各格助詞の生起率	26
5-3 他動詞文における主格と対格の相関	30
6 おわりに	33
参照文献	35

1 はじめに

日本語では、名詞が述語となる文において、「明日は休みだ」のようにコピュラが生起する場合と、「明日は休み」のようにコピュラが生起しない場合があり、このコピュラの出現には方言による差が見られることが指摘されている[白岩・平塚・酒井(2016)]。

このようなコピュラ生起の方言差について、現時点で最も詳細な分析を行っているのが白岩・平塚・酒井(2016)である。この研究によると、コピュラの生起と同様に格助詞の生起にも方言差が存在する可能性が示されており、さらに、格助詞生起の方言差とコピュラ生起の方言差とのあいだに何らかの関連性がある可能性が指摘されている。

本研究の目的は、名詞述語文におけるコピュラ生起の方言差と、格助詞生起の方言差との関係について、先行研究の主張を再検証し、談話資料から得られたデータにおいてその主張がどの程度裏付けられるのかを明らかにすることである。具体的には、『DDJD_全国方言談話データベース統合版』に収録された複数地点の談話データを用い、コピュラおよび格助詞の生起率をもとに分析を行う。

その結果、本研究では、コピュラ生起、格助詞生起については先行研究とおおむね一致する地域差が確認された一方で、コピュラ生起と格助詞生起とのあいだに明確な相関関係は確認されなかった。また、他動詞文においては主格と対格の生起のあいだに比較的強い正の相関が確認され、経済性の原則のみでは説明しきれない側面があることが確認された。

2 先行研究

2-1 コピュラについて

白岩・平塚・酒井(2016)では、コピュラによる文終止の例として以下のものを挙げている

- (1)a. 明日は休みだ (福島)
asita=wa yasumi=da
明日=TOP 休み=COP
明日は休みだ (白岩・平塚・酒井(2016))

- b. 明日は休みや (関西)
asita=wa yasumi=ya
明日=TOP 休み=COP
明日は休みだ (白岩・平塚・酒井(2016))

- c. 明日は休みや* (福岡)
asita=wa yasumi=ya
明日=TOP 休み=COP
明日は休みだ (白岩・平塚・酒井(2016))

「明日は休みだ。」のようなコピュラによる文終止は標準語同様、福島・関西方にはあるが、福岡方言では許容されない。

- (2)a. 明日は休みだよ (福島)
asita= wayasumi=da=yo
明日=TOP 休み=COP=SFP
明日は休みだよ (白岩・平塚・酒井(2016))

- b. 明日は休みやよ* (関西・福岡)
asita= wayasumi=ya=yo
明日=TOP 休み=COP=SFP
明日は休みだよ (白岩・平塚・酒井(2016))

標準語同様、福島方言ではコピュラにヤが後続するが、関西・福岡方言では許容されない。

図1は『日本言語地図』第46図「〈いい天気〉だ」〔国立国語研究所(1981)〕の略図である。肥筑方言域ではコピュラなしとする地点が多く、バイ、タイとなっている地点もあるが、これらは終助詞であり、コピュラではないとされている。このほか、中四国のいくつかの地域でも、地図には確認できないが、コピュラの生起が限られると推測されている。おおむね西の方言ほど、コピュラの生起環境が限定的で、東の方言ほど生起しやすいとされる。

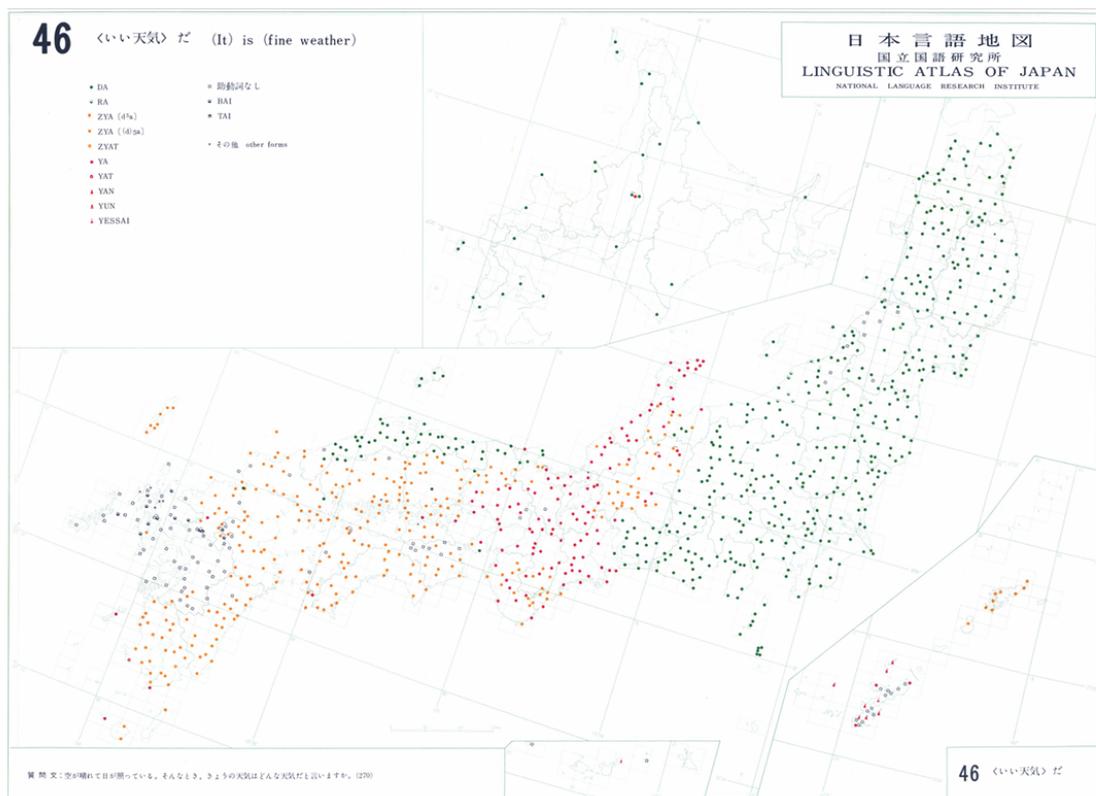
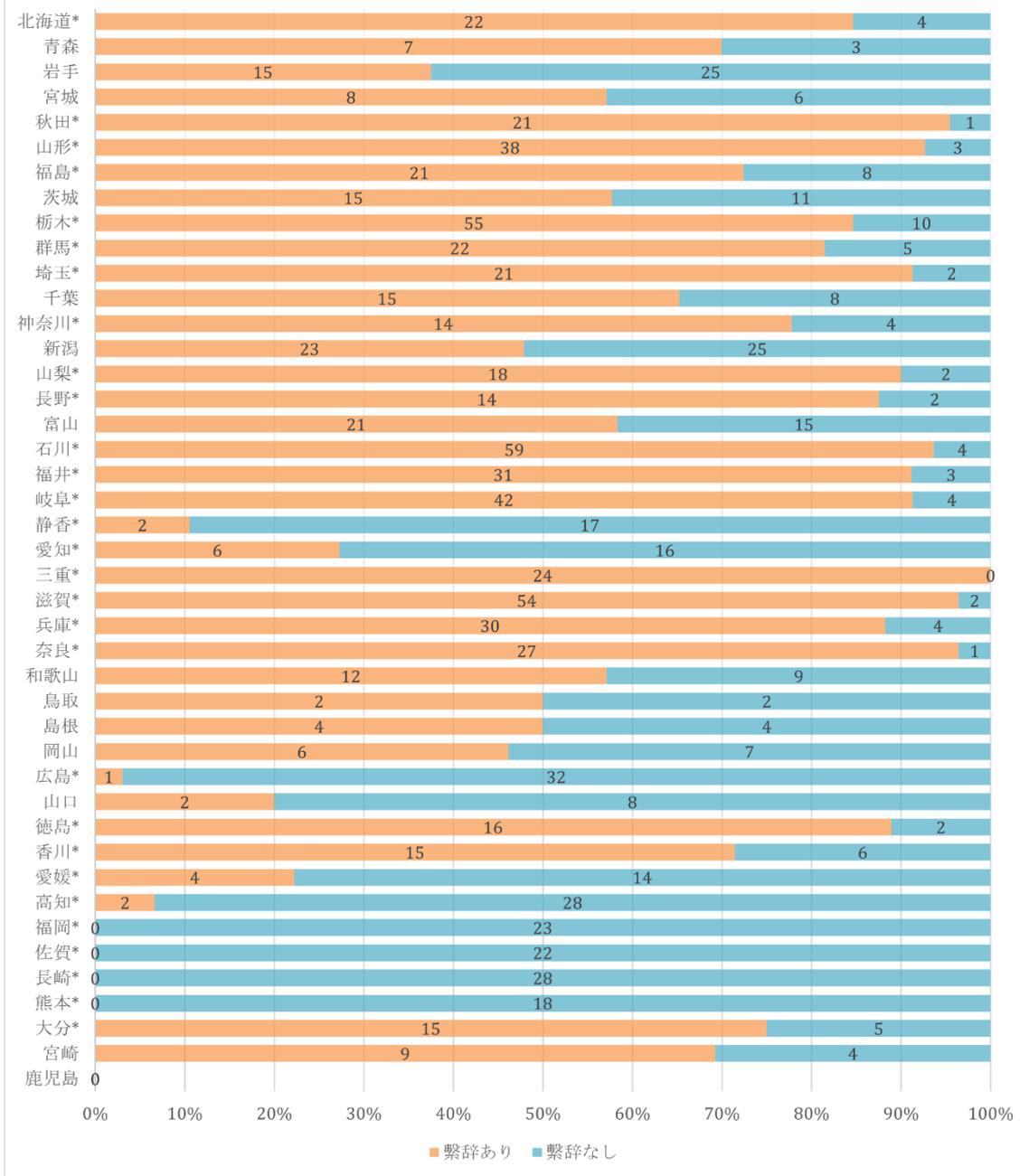


図1：“いい天気だ”の「だ」

グラフ1は白岩・平塚・酒井(2016)において『全国方言資料』を用い、「Nだ。」のようにコピュラが生起するものと「N。」のようにコピュラが生起しないものの出現頻度が地点別に示された表をグラフ化したものである。いずれかに偏る程度差が統計的に有意である場合(5%水準)*が付いている。近畿以東の地点ではコピュラありの頻度が高く、広島・愛媛・高知の各地点、肥筑方言域ではコピュラなしの頻度が高い。

また終助詞がつく場合も、東の方言ほどコピュラが生起しやすく、西の方言ほどしにくい傾向があると述べられている。

グラフ1:コンピュータの生起数



2-2 項の役割標示について

文中の項（格成分）となっている名詞句（主語や目的語）に対する標示（項の役割標示、以降では項標示と呼ぶ）、すなわち格標示および取立て標示を考えた時、先行研究で問題にされたコンピュータの有無と同様に、項標示に関してもまた有形標示の欠如、すなわち無助詞の問題がある。方言によって、項として用いられる名詞句が徹底して格助詞あるいは取り立て助詞で項標示され、無助詞になりにくいことがある。このような方言

では、無助詞名詞句である時点で格成分である可能性が排除され、したがってそれが述語成分（名詞述語）として解釈されるだろうという予測が成り立つ。このことから、こうした方言では名詞述語であることの標示、すなわちコンピュータを必要としないという可能性が白岩・平塚・酒井(2016)で示唆されている。

このことを簡単に理解するために、今仮想的な言語体系を想定して説明してみたい。以下に示す(3a)のように格成分も述語成分もその標示を欠く言語の場合、**sensee** が述語だと判定しにくく、例えば目的語と間違われる可能性があるだろう。(3b)のように項標示に関して無助詞を許さない言語の場合、**sensee** はコンピュータなしでも述語だと同定できる。逆に項標示で無助詞が許される言語で、実際に(3c)のように無助詞として生じる場合、**sensee** を述語成分として同定させるためには、(3b)の言語に比べればコンピュータを用いる必要性が高まるだろう。

(3)a. **watasi** **sensee**
私 先生
「私は先生だ」 (筆者作例)

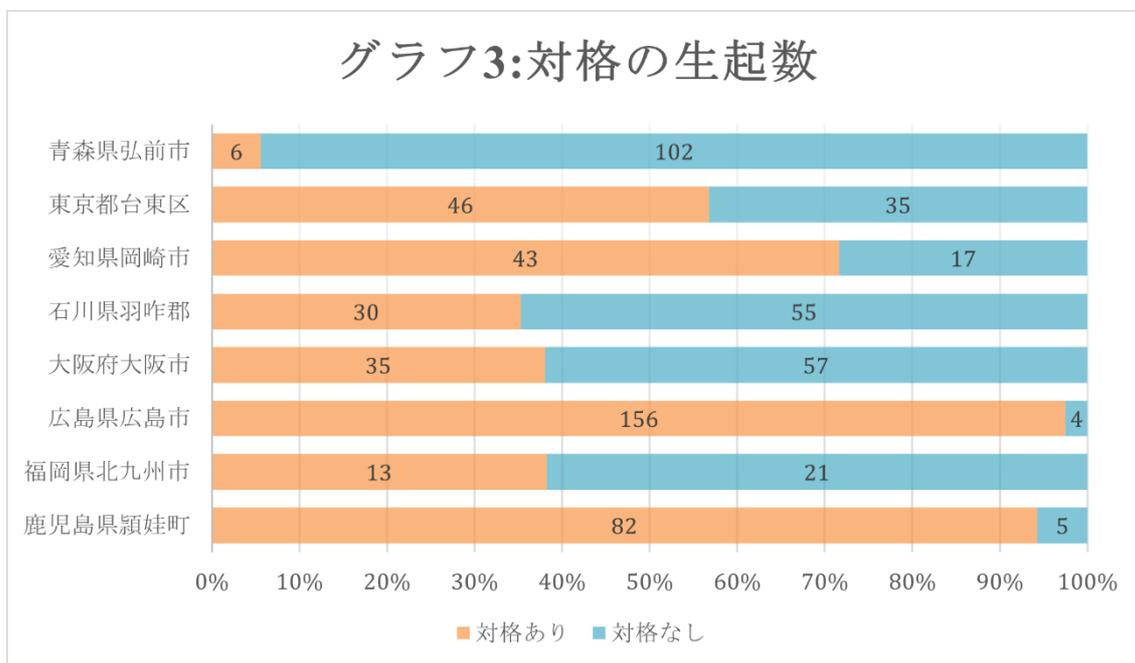
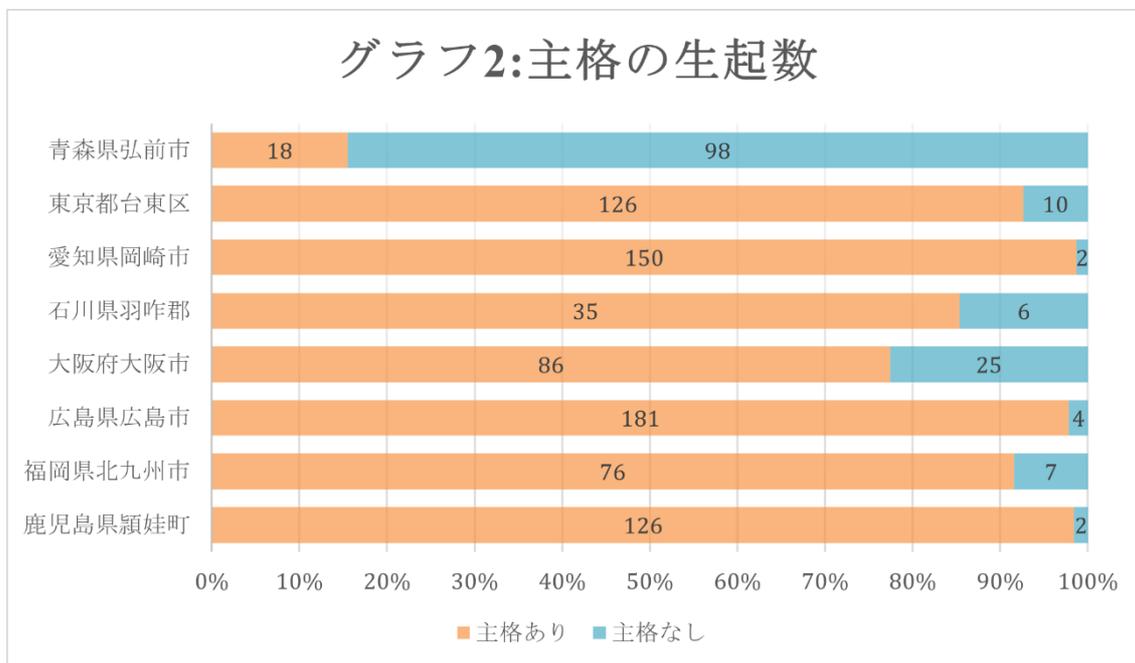
b. **watasi=wa** **sensee**
私=TOP 先生
私は先生だ (筆者作例)

c. **watasi** **sensei=da**
私 先生=COP
私は先生だ (筆者作例)

このように、項標示とコンピュータ標示の間に経済性の原則が成り立ち、どちらかによってどちらかが同定されれば他方は標示不要との考え方が、白岩・平塚・酒井(2016)の考え方である。

この考え方を実証するため、白岩・平塚・酒井(2016)は、格助詞の生起頻度について木部(2015)、梅村(2016)のデータを整理している（グラフ2とグラフ3は白岩・平塚・酒井(2016)の表をグラフ化したもの）。ごく大まかな傾向として西側の方言ほど格助詞の生起頻度が高いように見られる。このことから、白岩・平塚・酒井(2016)は、西側の方言ほど述語名詞句が繫辞による標示を必要としないという可能性を指摘する。2-1で示した繫辞の生起頻度と併せて見ると、広島・愛媛・高知以西で大分・宮崎のみ繫辞ありが多く、その宮崎・大分と共通点が多い豊日方言域である北九州市では格助詞なしの割合が広島と鹿児島と比べて

も高くなっている。白岩・平塚・酒井(2016)ではこの結果を格助詞の生起状況に応じて繫辞の生起も周辺の地点と異なる傾向を示すものと解釈できるかもしれないと述べている。



2-3 問題点

先行研究である白岩・平塚・酒井（2016）は、名詞述語文におけるコピュラ生起の方言差と、格助詞生起の方言差とのあいだに関連がある可能性を指摘している。しかし、その検討方法にはいくつかの問題点が残されている。

第一に、コピュラ生起と格助詞生起を比較する際に、同一地点どうしを対応させた分析が十分に行われていない点が挙げられる。先行研究では、大分・宮崎と北九州といったように、異なる地点の傾向をもとに議論が進められており、地点ごとにコピュラ生起率と格助詞生起率を一对一で対応させて検討する方法は採られていない。そのため、観察された傾向が本当に同一地点内で成立しているのか、それとも地域をまたいだ比較によって生じたものなのかが判然としないという問題がある。

第二に、格助詞の扱いに関して、主格と対格の区別が十分に考慮されていない点である。一般的に、日本のどの方言においても、主語は既知の情報であることが多いことから省略されやすく、名詞句があらわれた場合、それは目的語であることが多い。したがって、「名詞述語か項か」という二択で考える場合、経済性の原則で考えると項として現れる名詞句は、実質的に目的語である可能性が高い。

このような前提に立てば、経済性の原則からは、目的語における格標示が生じやすい地域ほど、名詞述語文におけるコピュラ標示が抑制される、あるいはその逆の関係が見られる、すなわち目的語の格標示とコピュラの標示の関係に、負の相関が強く表れると予測される。したがって、コピュラ生起との関係を検討する際には、主格と対格を区別した上で分析を行う必要がある。しかし、先行研究では主格と対格をまとめた形で格助詞生起が扱われており、この点について十分な検討がなされていない。

さらに、先行研究で用いられている地点数は8地点と少数であり、そこで示された関係は、あくまでおおまかな傾向に基づくものである。このような関係は、本来、相関という統計的概念を用いて数量的に示すことが可能であるにもかかわらず、先行研究では相関係数などを用いた検証は行われていない。

以上の点を踏まえると、コピュラ生起と格助詞生起の関係を再検討するためには、より多くの地点を対象とし、地点ごとにコピュラ生起率および格助詞生起率を算出した上で、主格と対格を区別しつつ、両者の関係を相関分析によって数量的に検討する必要があるといえる。

3 調査手法

本研究では、『DDJD_全国方言談話データベース統合版』に収録されている談話資料を用いた。『日本のふるさと言葉集成』（全 20 巻）に収録された談話資料をもとに構築されたデータベースであり、本研究では各都道府県につき 1 地点の方言を（合計 47 地点）分析対象とした。

主節文末位置の非過去肯定形の名詞述語文（名詞、ノダ文を述語に取った例）を収集。コピュラの生起しない場合に述語とみなすべきか判断しにくいもの（「まだだ」や「九時からだ」等）、丁寧体系式、東北や九州で見られる縮約の進んでない形式（「である」や「だる」、「じゃる」）は除く。コピュラ文に関して、コピュラの後終助詞が続く例が多くみられたため、終助詞がつく場合は別で収集を行った。

格助詞については自動詞文と他動詞文を区別して分析を行う。経済性の原則の観点からは、項として現れる名詞句において格標示がどの程度行われるかが重要となるが、自動詞文と他動詞文では、項の構成自体が異なるため、同一の基準で扱うことは適切ではないためである。また、先行研究では格助詞を主格と対格に分けた詳細な検討が十分になされておらず、格助詞生起とコピュラ生起の関係が、どの文型において成立しているのかが明確ではなかった。自動詞文と他動詞文を区別することで、主格のみが関与する環境と、主格・対格の双方が関与する環境を分けて検討し、より精緻な分析を行うことを目的とした。

地点ごとにコピュラ出現率と主格出現率（自動詞文、他動詞文）、対格出現率を算出し、各地点を 1 つのデータポイントとして、それぞれが持つコピュラ標示率と項標示率の相関関係をみる。その際、ピアソンの相関係数の検定を行い、母相関係数の検定を行う。帰無仮説は、コピュラ標示率と項標示率の間に相関関係はない（ $\rho=0$ ）という仮説、対立仮説は先行研究の仮説（負の相関が見られる）である。

表 1 は実際の収集例である。表では、縦軸に例文、横軸に観察対象となる形式（コピュラ、コピュラ（終助詞あり）、自動詞文の主語、他動詞文の主語、目的語）を配置している。横軸に設定した各項目については、当該文において生起が期待される位置に形式が実際に現れているかどうかを基準に、生起した場合、生起しなかった場合をそれぞれ 1 または 0 として記録した。これにより、各例文は「何箇所中、何箇所で生起したか」という形で数値化される。たとえば、他動詞文においては、主語および目的語の二つの項が想定されるため、主語・目的語それぞれについて格助詞が生起していれば 1、生起していなければ 0 としてカウントした。一方、自動詞文では主語のみが想定されるため、自動詞主語の欄のみを対象として生起の有無を記録した。例文(4)「太郎（が）花子を見た」は他動詞文であり、主語と目的語の二つの項をもつ。この文では、主語「太郎」に主格助詞が付かない場合、他動詞主語の欄は 0/1 とカウントされる。一方、目的語「花

子」には対格助詞「を」が生起しているため、目的語の欄は 1/1 となる。例文(5)「あの家が太郎の家(だ)」は名詞述語文であり、コピュラの生起が観察される対象となる。この文では、終助詞を伴わないコピュラが生起していないため、コピュラの欄が 0/1 となる。また、主語である「あの家」には主格助詞が生起しているため、自動詞主語の欄が 1/1 とカウントされる。例文(6)「彼女が建てたのだよ」は、コピュラに終助詞を伴う形式が観察される他動詞文である。本例では、終助詞付きの形式が生起しているため、コピュラ(終助詞)の欄を 1/1 として記録し、同時に主語位置に主格助詞が生起しているため、該当する主語の欄も 1/1 とカウントされる。

表 1

例文(筆者作例)	コピュラ	コピュラ (終助詞)	自動詞主語	他動詞主語	他動詞 目的語
(4)太郎(が) 花子を見た				0/1	1/1
(5)あの家が 太郎の家(だ)	0/1		1/1		
(6)彼女が建てた のだよ		1/1		1/1	

今回調査したのは以下の47地点である

表 2

01	北海道十勝支庁中川郡豊頃町牛首別	24	三重県志摩郡阿児町立神
02	青森県弘前市若党町、亀甲町	25	滋賀県甲賀郡甲賀町神
03	岩手県遠野市土淵町土淵	26	京都府京都市中京区
04	宮城県仙台市八幡	27	大阪府大阪市東区(現・中央区)
05	秋田県湯沢市角間	28	兵庫県相生市相生
06	山形県東田川郡楡引町大字丸岡	29	奈良県五條市五條
07	福島県大沼郡昭和村大字大芦	30	和歌山県田辺市芳養町
08	茨城県水戸市上国井町	31	鳥取県米子市大篠津町
09	栃木県日光市小来川地区	32	島根県仁多郡仁多町大字亀嵩
10	群馬県前橋市富田町字下富田	33	岡山県小田郡矢掛町内田
11	埼玉県児玉郡上里町黛	34	広島県広島市古江東町
12	千葉県長生郡長生村一つ松	35	山口県豊浦郡豊北町阿川
13	東京都台東区	36	徳島県阿南市富岡町トノ町
14	神奈川県小田原市久野字中久野	37	香川県観音寺市池之尻町
15	新潟県糸魚川市上刈	38	愛媛県松山市久谷町奥久谷
16	富山県砺波市鷹栖	39	高知県高知市領家、針原
17	石川県羽咋郡押水町字宝達	40	福岡県北九州市八幡東区大字大蔵字河内
18	福井県勝山市平泉寺町平泉寺	41	佐賀県佐賀市久保泉町上和泉草場
19	山梨県塩山市中萩原	42	長崎県平戸市大野町
20	長野県木曾郡開田村大字西野	43	熊本県球磨郡錦町一武東方
21	岐阜県中津川市苗木	44	大分県大分郡挾間町谷
22	静岡県静岡市足久保奥組	45	宮崎県宮崎市青島
23	愛知県常滑市矢田	46	鹿児島県揖宿郡穎娃町牧之内飯山
		47	沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊

4 調査結果

4-1 コピュラの生起

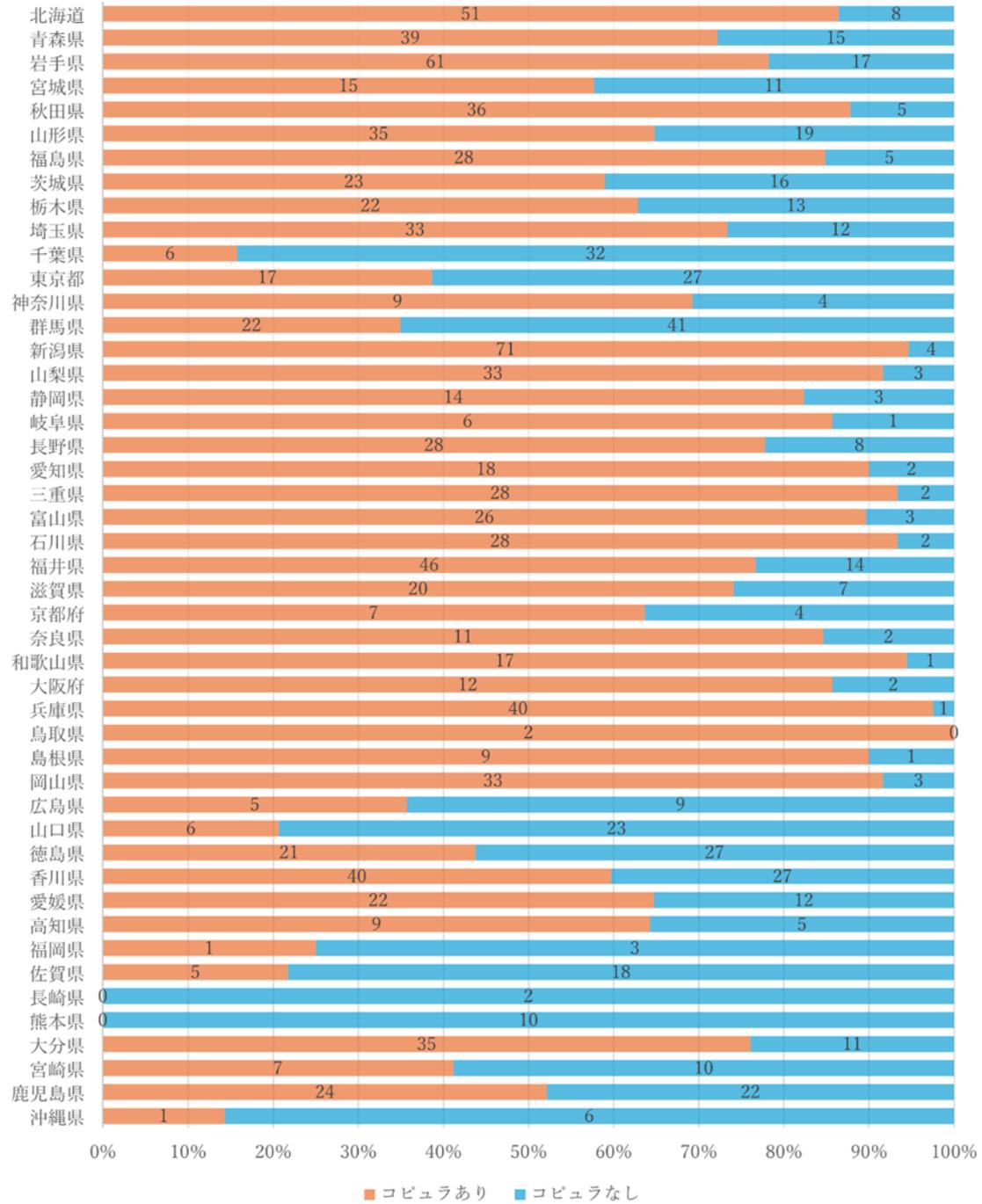
調査結果から、名詞述語文におけるコピュラ生起については地域差が存在することが確認された。全体的な傾向として、中国地方以西、とくに九州北西部の肥筑方言域ではコピュラの生起率が低く、名詞句のみ、あるいは終助詞によって文が完結する例が多く見られた。一方、中国地方以東の地点では、名詞述語文においてコピュラが生起する割合が比較的高く、コピュラの生起状況に東西差がみられた。

この分布は、『日本言語地図』や白岩・平塚・酒井（2016）で述べられていたような傾向と一致しており、名詞述語文におけるコピュラ生起の方言差が、今回使用した各地点の談話データにおいても確認されたといえる。とくに肥筑方言域では、「〈いい天気〉ばい」「〈いい天気〉たい」のように、文末に終助詞がつく場合が多くみられ、述語名詞の標示にコピュラが使用されない言語であることがうかがえた。

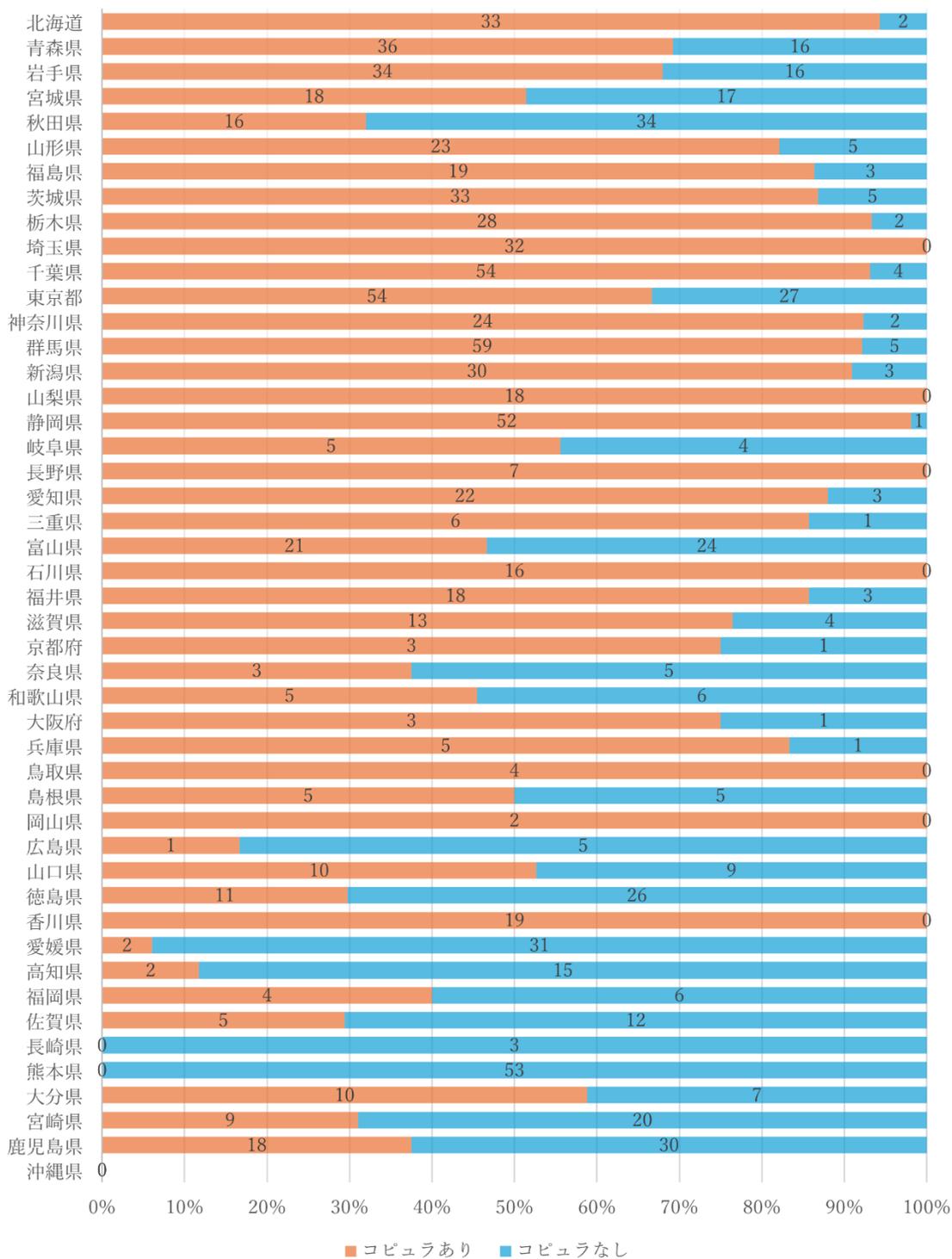
また、今回の調査では終助詞を伴う名詞述語文についても別に集計を行ったが、終助詞がつく場合であっても、大まかな傾向としてコピュラ生起の傾向は地域ごとに大きく変わることはなく、東側では生起しやすく、西側では生起しにくいという基本的な分布は維持されていた。この点から、コピュラの生起については、単に文末に終助詞があるかどうかはそこまで関係のあるものではなく、より体系的な方言差に基づくものであると考えられる。

同じ九州内においても、大分のように周辺の地域と異なる傾向を示す地点が確認されており、コピュラ生起の方言差は単純な東西の傾向というようには捉えられないが、コピュラの生起に関して一定の方言差が存在していることは改めて確認することができた。格助詞の生起との関係については 4-3 で検討を行う。

グラフ4:コンピュータの生起数



グラフ5:コンピュータの生起数（終助詞あり）



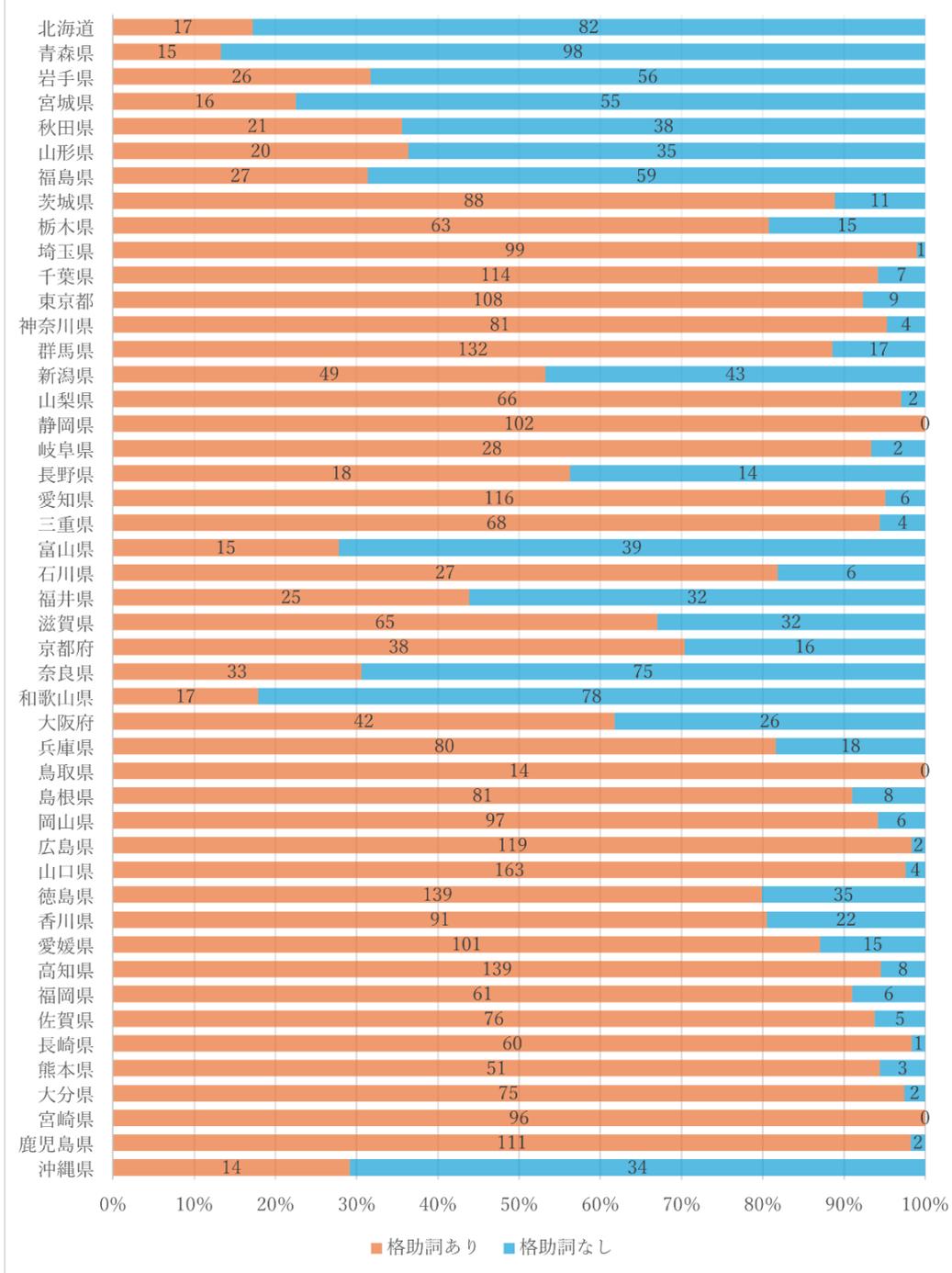
4-2 格助詞の生起

本節では、格助詞の生起について地域差を検討する。先行研究では、格助詞生起の方言差について、主格と対格を区別した上で分析が行われており、東日本では無助詞が許容されやすく、西日本では格助詞が生起しやすいという大まかな地域的傾向が指摘されている。本研究で用いた談話資料においても、まずこの先行研究の枠組みに沿って格助詞生起の分布を確認する。その結果、主格・対格のいずれにおいても、北海道・東北地方の地点では無助詞となる割合が比較的高く、それより西の地点では格助詞が生起しやすいという傾向が確認された。この点において、本研究の結果は、先行研究で示されてきた主格・対格の地域差と整合的であるといえる。しかしながら、先行研究の分析では、主格については自動詞文の主格と他動詞文の主格が区別されておらず、両者が一括して扱われている点に問題が残る。日本語の談話においては、自動詞文の主語と他動詞文の主語では、構造や省略の起こりやすさが異なる可能性を考慮する必要がある。このような違いを考慮せずに主格を一括して扱っていると、談話的に性質の異なる用例が混在してしまう。

そこで今回は、格助詞生起の分布をより詳細に捉えるため、自動詞文の主格標示、他動詞文の主格標示と対格標示をそれぞれ集計した。

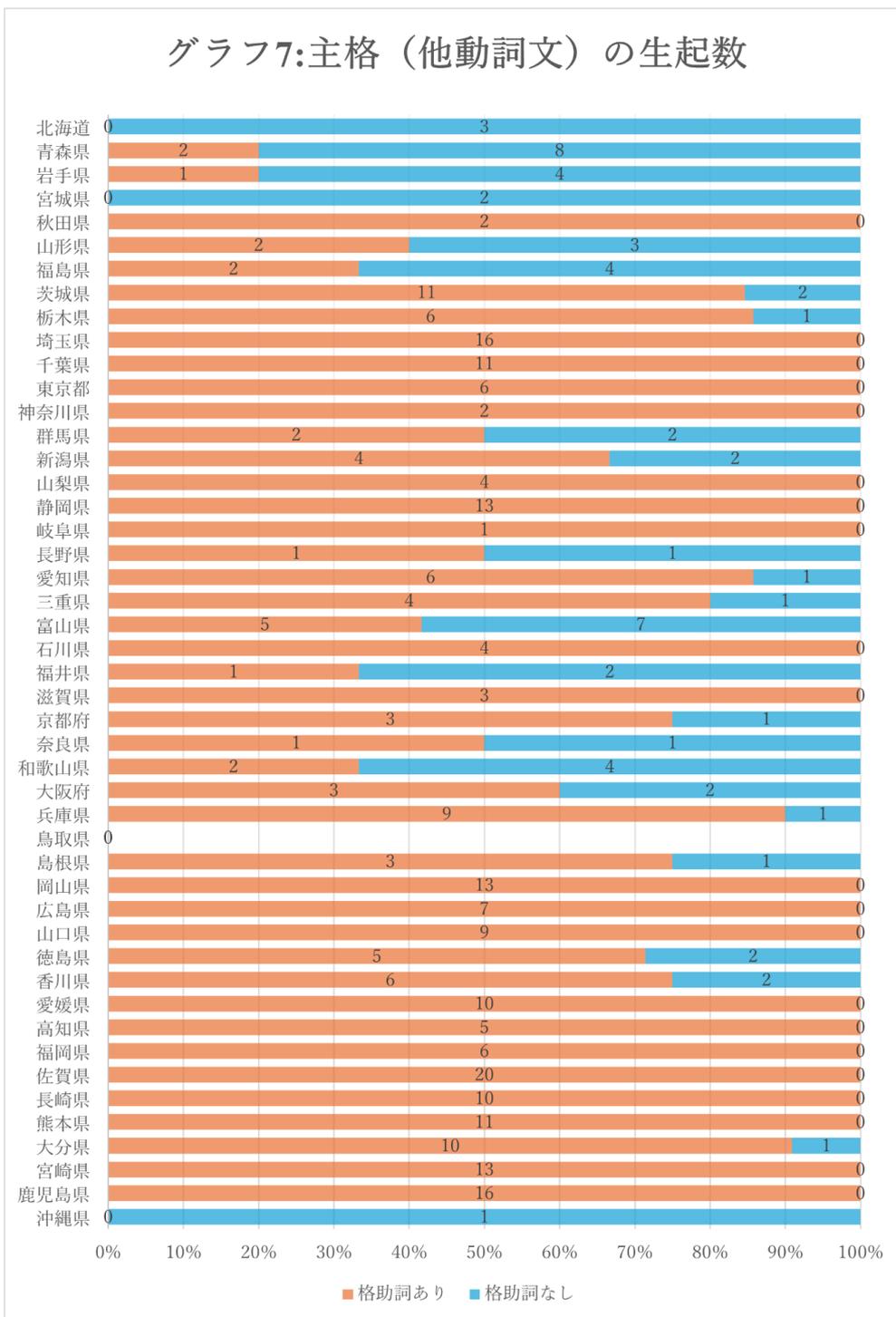
コンピュータと同様、格助詞の生起についても調査結果から生起の地域差が確認された。自動詞文の主格に注目すると、北海道・東北地方の地点では無助詞になる割合が比較的高く、それより西の地点では格助詞が生起しやすい傾向が見られた。この分布は、先行研究で示されていたように「西日本ほど格助詞が生起しやすい」という大まかな傾向と一致している。

グラフ6:主格（自動詞文）の生起数



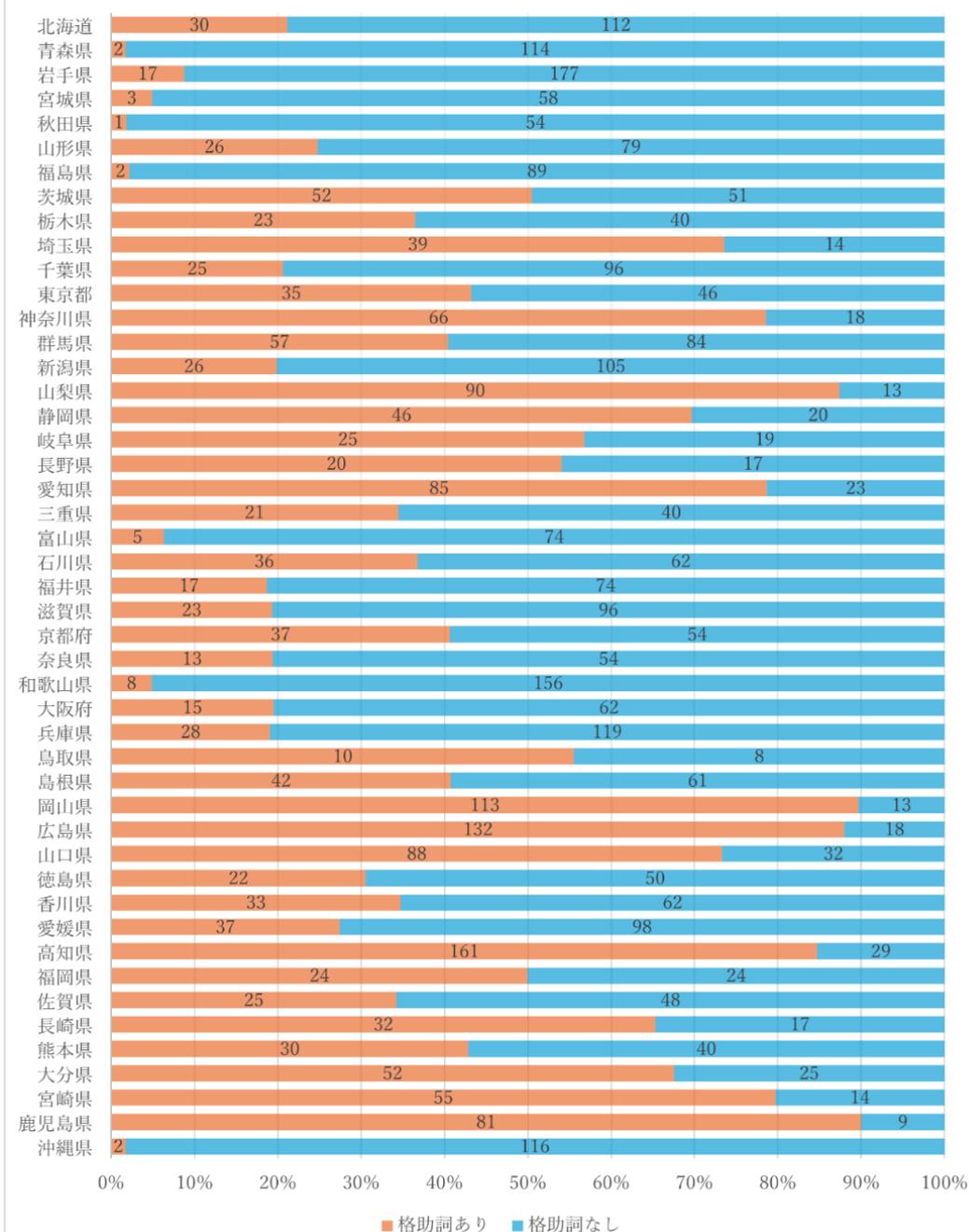
他動詞文の主格についても、おおむね同様の地域差が確認されたが、談話資料から収集したデータだという性質上、文中において主語と目的語の両方が現れる例がそこまで多くはなく、これから他動詞文の主格の生起について検討をしていく際にはさらに多くの地点のデータを収集する必要がある。それでも、主格に関しては、自動詞文・他動詞文の別を問わず、東日本で無助詞が許容されやすく、西日本で格助詞が生起しやすいというおおまかな方向性が見て取れた。

グラフ7:主格（他動詞文）の生起数



対格については、大まかな傾向として主格と同じように北海道・東北地方の地点において無助詞になりやすい傾向が見られたが、全体に注目してみると、主格の生起と比較して無助詞になる割合が高くなっているように見える。関西圏に注目すると滋賀や京都、大阪、兵庫のように主格の生起と対格の生起で逆の傾向を示すような地点も存在していた。このようなことから対格の生起は主格の生起に比べ地域差による影響を受けにくい格である可能性が読み取れる。

グラフ8:対格の生起数



コピュラと同様に格助詞の生起についても、富山県や和歌山県のように、周囲の地点とは異なる傾向を示す地点が存在する。このような地点が存在していることは、その格助詞の生起の地域差が連続的ではなく、部分的に連続したものではないことを示しており、日本語方言における格標示体系が一様ではないことを改めて示しているものではないかと考えることができる。

以上をまとめると、コピュラの場合と同様に、格助詞の生起についても一定の地域差が存在していることは確認できたが、特に対格においてはその無助詞化などがほかの条件に依存している可能性もある。よって、格助詞の生起についても様々な面からの再検討をしていく必要がある。コピュラの生起との関係については4-3で検討していく。

4-3 コピュラ生起の方言差と格助詞生起の方言差

すでに述べたように、本研究は先行研究と異なり、コピュラ生起と格助詞生起の関係について、同一地点の談話データを用いてそれぞれ集計するという方法をとっている（「3 調査手法」を参照）。その結果、両者のあいだには単純な対応関係は認められなかったが、その分布の捉え方によって異なる側面が明らかになった。

まず、日本列島全体を俯瞰した大まかな傾向としては、コピュラの生起は東日本で多く、西日本で少ないという分布が確認された。この点においては、白岩・平塚・酒井(2016)が示唆していた傾向と一致しており、名詞述語文におけるコピュラ生起の方言差について一定の存在を、談話データに基づいて再確認する結果となった。

先行研究では、この東西差について、格成分が無助詞になりにくい方言では、名詞句が述語であることが明確であるため、コピュラによる標示を必要としない可能性が示唆されている。すなわち、最小限の労力で最大限の情報を伝えようとするという経済性の原則に基づけば、西側の方言においてコピュラの生起が省略されやすいという説明は、ある程度の妥当性をもつ。

しかし、本研究で地点別にコピュラの生起と格助詞の生起を一対一で対応させて詳細に検討をしてみると、こうした説明だけでは捉えきれない結果も存在していることが明らかになった。具体的には、コピュラ生起率が高く、同時に格助詞生起率も高い地点が複数確認され、必ずしも「一方が高ければ他方が低い」という関係にはなっていないことが確認された。

このことは、格助詞が生起しやすいからといって、直ちにコピュラの生起が不必要とされるわけではなく、逆に格助詞が無助詞になりにくい場合も、コピュラが必要とされる場合が多々存在しているということを示している。すなわち、コピュラ生起と格助詞生起は、理論的には関連づけて説明可能であるものの、実際の使用においては、必ずしも相補的な関係になっていないのではないかと考えられる。

この点については、九州地方における大分県の事例を見ても明らかである。大分県は、今回の調査においても先行研究における大分・宮崎と北九州の関係のように、周囲の方言とは異なる挙動を示す地点として確認されていたが、調査の結果において、コピュラ生起の割合・格助詞生起の割合のいずれもが高いという特徴を示した。このような地点の存在は、コピュラと格助詞の関係を、単純な一方向の関係として捉えることができないうことを表している。

5 相関関係の検証

前節では、各地点におけるコピュラの生起と格助詞の生起を一対一で対応させ、それぞれの数値を比較することによって、両者の関係について検討を行った。その結果、日本全体を大まかに見た場合には一定の傾向が確認される一方で、地点別に見ると、必ずしも単純な対応関係が成立しないことが明らかになった。

しかし、このような個別比較だけでは、両者の関係がどの程度体系的なものであるのか、あるいは偶然的なばらつきの範囲にとどまるのかを判断することは難しい。そこで本章では、47 地点それぞれにおけるコピュラ、格助詞それぞれの生起率を用い、その相関関係を数値化することで、日琉諸語におけるコピュラ生起と格助詞生起の関係を定量的に検討する。統計にあたり、R (R Core Team 2025)によって分析を行った。

まず、5-1 節において、先行研究の主張と直接比較することができるように、終助詞が見つからない場合のコピュラの生起率と、格助詞全体（主語、目的語を問わない項標示全体）の生起率とのあいだで相関分析を行う。この分析を行うことで、先行研究で示唆されていた「格成分として用いられる名詞句が、格助詞によって標示されやすい方言ほど、名詞述語においてコピュラによる標示を必要としない」という関係、すなわち負の相関関係が確認できるかどうかを検討する。

その上で、5-2 節以降では、終助詞の有無を区別したコピュラ生起率と、自動詞文・他動詞文における主格および対格の生起率との関係について、段階的に分析を進めていく。これにより、コピュラ生起と格助詞生起の関係が、単一の対応関係として捉えられるのか、あるいはそのほかの様々な条件に影響を受けて変化するものなのかを、より細かく明らかにすることを目的とする。

5-1 コピュラの生起率（終助詞なし）と格助詞全体の生起率

本節では、先行研究で想定されていた組み合わせで相関分析を行う。名詞述語文におけるコピュラ生起および動詞文における格助詞生起を数量化するため、以下の変数を設定した。

まず、コピュラ生起に関しては、終助詞の有無を区別して二種類の変数を設けた。**copa** は、終助詞を伴わない名詞述語文におけるコピュラの生起率を表す変数である。**copb** は、終助詞を伴う名詞述語文におけるコピュラの生起率を表す変数である。

次に、格助詞生起に関しては、文型および格の違いを考慮し、自動詞文と他動詞文を区別した上で、以下の三種類の変数を設定した。**s** は、自動詞文における主格助詞の生起率を表す変数である。**a** は、他動詞文における主格助詞の生起率を表す変数である。**p** は、他動詞文における対格助詞の生起率を表す変数である。各変数はいずれも、地点ごとに「生起回数／生起可能回数」によって算出した生起率であり、地点間での比較お

よび相関分析に用いた。

まず終助詞が見つからない場合のコピュラ生起率 (copa) と、格助詞生起率全体 (s+a+p) とのあいだで相関分析を行った。本分析では、先行研究においてコピュラ生起と格助詞生起のあいだに負の相関が想定されていることを踏まえ、負の相関を対立仮説とする片側検定を行った。

その結果、相関係数は $r = -0.24$ と負の値を示し、コピュラ生起率が高い地点ほど格助詞生起率が低くなる弱い相関が確認された。しかし、ピアソンの母相関検定の結果、サンプルに見られるこの相関は統計的に有意とは言えず ($p = 0.106$)、95%CI [-0.49, 0.05] と 0 を含む。すなわち、本分析において観察された相関は、無相関の元で偶然によって生じた可能性を排除することはできないという結果になった。

この結果から、先行研究で示唆されていた「格成分として用いられる名詞句が、格助詞によって標示されやすい方言ほど、名詞述語においてコピュラによる標示を必要としない」という関係が、明確な相関関係としては確認できなかった。一方で、サンプルにおける相関係数の符号が負であった点は、先行研究の想定と方向性としては一致しており、両者の関係が完全に無関係であるとは言い切れない。

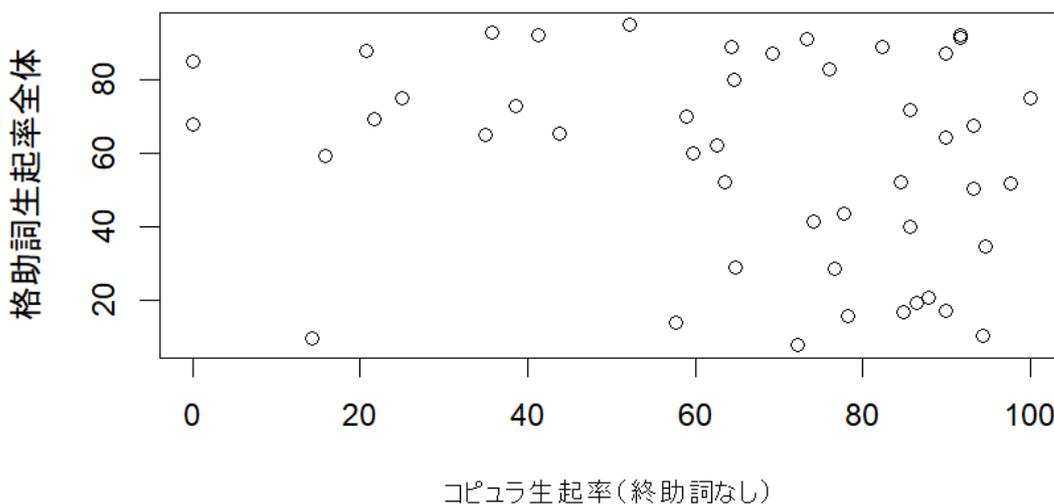


図2 横軸：コピュラの生起率（終助詞なし） 縦軸：格助詞全体の生起率

今回の結果は、サンプルの少なさもさることながら、データポイント間の独立性が必ずしも担保されていないという点で問題がある可能性もある。しかし、この問題をクリアするためには、各方言区域の多数のサンプル地点を用意し、そこからランダムに抽出する二段階抽出などの方法が必要となる。あるいは、主格標示率を対格標示率から予測

するモデルを作り、そこにランダム変数として地点を加味するなどの混合モデリングが必要となる。ところが、これらのためには、それほど多数の地点について一定量の談話データが記録されていることが前提となり、それは現時点では不可能である。本研究では、同一地点の談話データから項標示率とコピュラ生起率を取得し、それによって地点間を比較するという点を最重要視したため、サンプルが少ない点と、データポイント間の独立性が確保されていない点を犠牲にしたと言える。この方法論上の問題については6節の結論でさらに述べる。

今述べた方法論的な問題は別として、なお残る問題もある。本節で示した結果は、先行研究の素朴な想定にあわせ、項標示について自動詞文・他動詞文といった違いを区別しておらず、「格成分となる名詞句」として一括して扱っている。さらに、コピュラに終助詞がつく場合を除外して考えている点も、実際の言語運用を踏まえれば、言語実態を踏まえたものか疑問が残る。これらの想定そのものが、真の相関を見逃す結果になった可能性が否定できない。以上のことから、コピュラ生起と格助詞生起の関係をより適切に検討するためには、場合分けを行った上で相関分析を行う必要がある。具体的には、終助詞の有無を区別したコピュラ生起率と、自動詞文・他動詞文それぞれにおける主格および対格の生起率との関係を個別に分析する。

5-2 コピュラの生起率と各格助詞の生起率

本節では、コピュラの生起率と自動詞文・他動詞文を区別した項標示の生起率とのあいだで相関分析を行う。本分析でも、先行研究においてコピュラ生起と格助詞生起のあいだに負の相関が想定されていることを踏まえ、負の相関を対立仮説とする片側検定を行った。コピュラについては、終助詞がつかないもの(copa)と、終助詞がつくもの(copb)を区別し、格助詞については、自動詞文の主格(s)、他動詞文の主格(a)、対格(p)に区別、それぞれの関係について検討を行った。

まず、終助詞がつかない場合のコピュラ生起率(copa)と各格助詞生起率との相関を見ると、自動詞文の主格とのあいだで $r=-0.28$ という弱い負の相関が得られた。この相関は有意水準5%には達せず($p=0.059$)、95%CIは $[-0.52, 0.01]$ と0を含む。

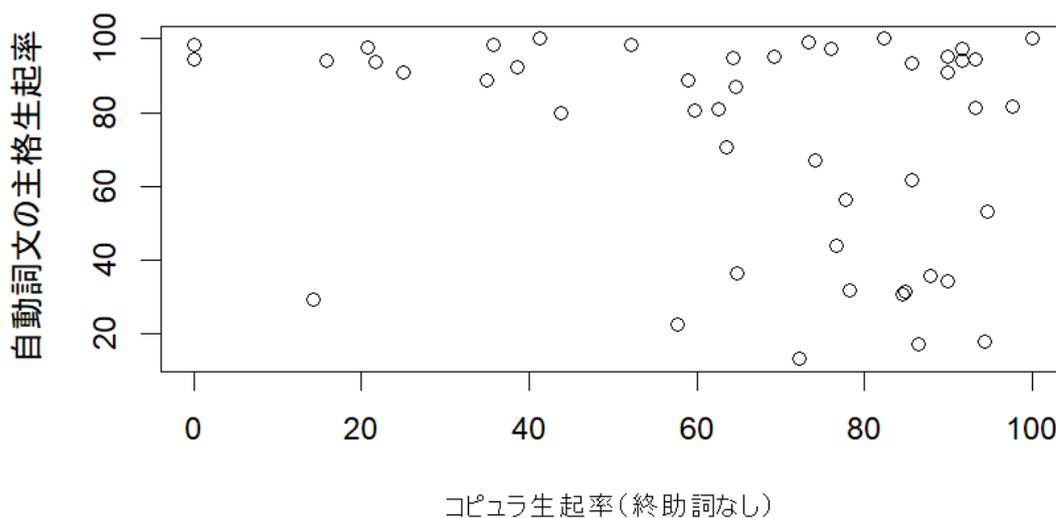


図3 横軸：コピュラの生起率（終助詞なし） 縦軸：自動詞文の主格生起率

同様に、他動詞文の主格とのあいだでも $r=-0.23$ と弱い負の相関が見られた。この場合も検定において有意とはならず ($p=0.122$)、95%CI も $[-0.48, 0.06]$ と 0 を含む結果になった。

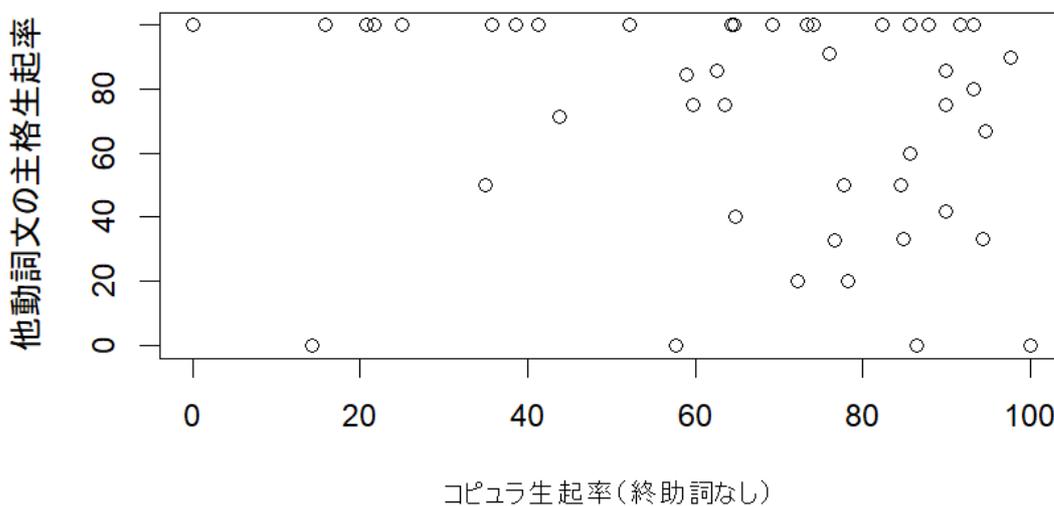


図4 横軸：コピュラの生起率（終助詞なし） 縦軸：他動詞文の主格生起率

一方、対格とのあいだでは相関係数は $r=-0.13$ とさらに小さくなり、検定の結果も有意ではなかった ($p=0.388$)。95%CI も $[-0.40, 0.16]$ という結果になった。

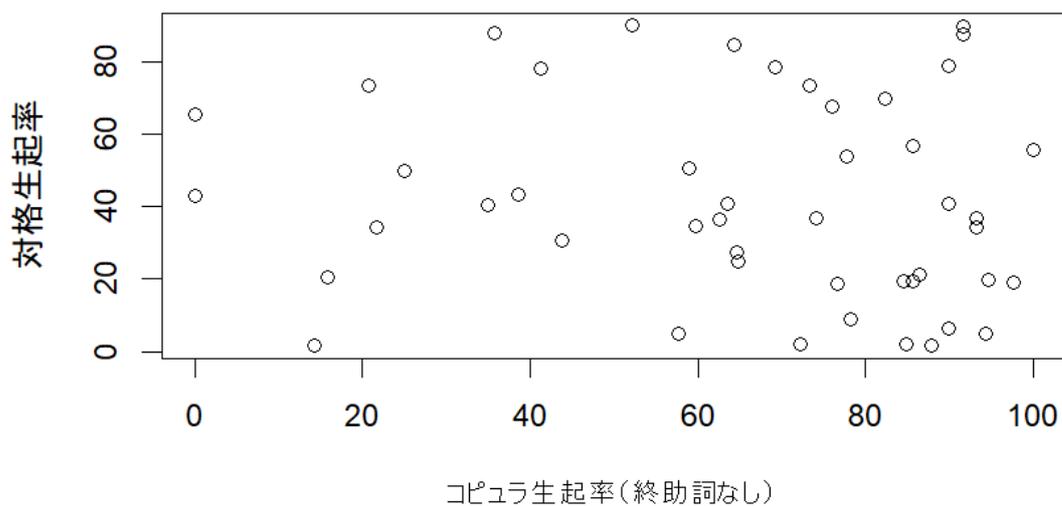


図5 横軸：コピュラの生起率（終助詞なし） 縦軸：対格生起率

このことから、終助詞が見つからない場合のコピュラ生起と格助詞生起との関係は、主格において相対的にやや強く見られるものの、いずれの結果も偶然による可能性を排除できないという結果になった。とくに、先行研究の考え方に従えば、主格よりも省略されやすいと考えられる対格において、より強い負の相関が生じる可能性が想定されるが、今回の分析ではそのような傾向は確認されなかった。

次に、終助詞を伴うコピュラ生起率 (copb) と各格助詞生起率との相関を見ると、どの場合においても相関係数は 0 に近い値を示す結果となった。本分析では、先行研究においてコピュラ生起と格助詞生起のあいだに負の相関が想定されていることを踏まえ、ここでも負の相関を対立仮説とする片側検定を行った。

その結果、自動詞文の主格とのあいだでは $r = 0.007$ となり、相関はほとんど認められなかった。検定の結果も有意ではなく ($p = 0.96$)、95%CI は $[-0.28, 0.29]$ と 0 を含んでいた。

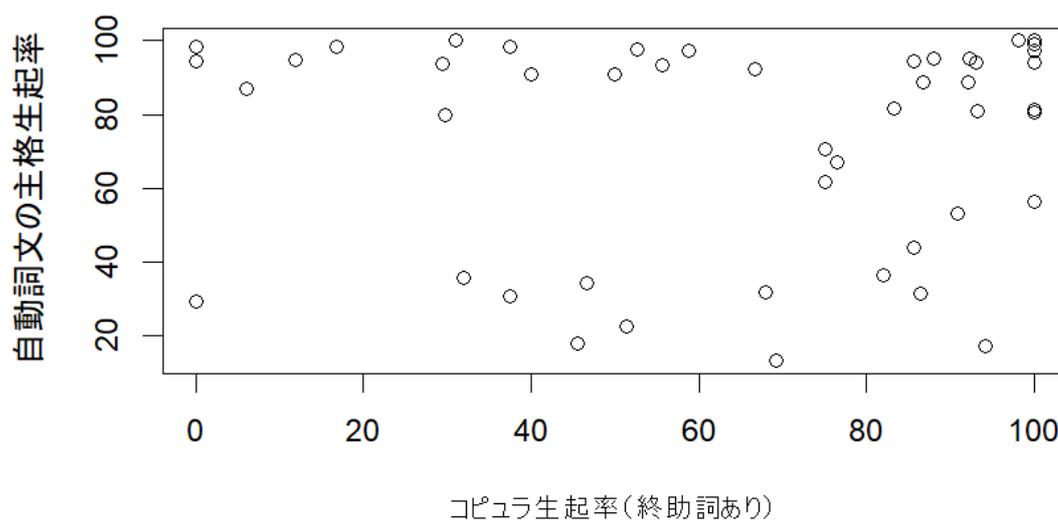


図 6 横軸：コピュラの生起率（終助詞あり）縦軸：自動詞文の主格生起率

同様に、他動詞文の主格とのあいだでは $r = -0.12$ であったが、この場合も片側検定において有意な相関は確認されず ($p = 0.41$)、95%CI は $[-0.40, 0.17]$ となった。

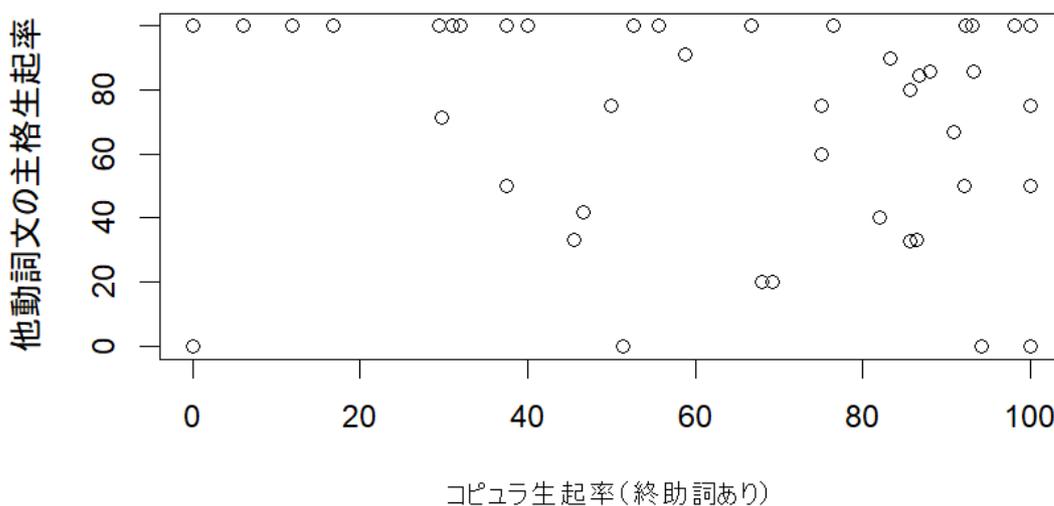


図7 横軸：コピュラの生起率（終助詞あり） 縦軸：他動詞文の主格生起率

対格とのあいだでは $r = 0.04$ とほぼ無相関に近い値を示し、検定の結果も有意ではなかった ($p = 0.80$)。95%CI も $[-0.25, 0.32]$ と 0 を含む結果となった。

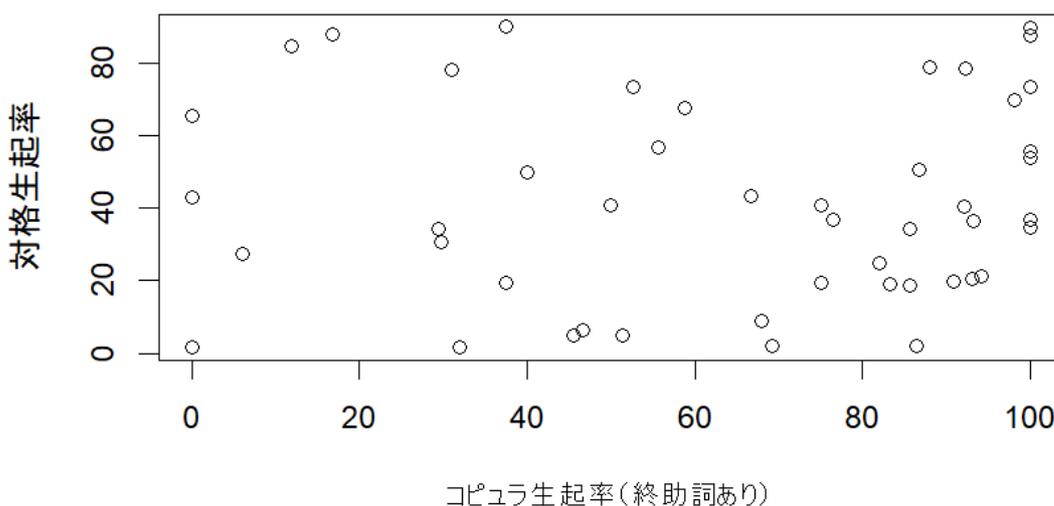


図8 横軸：コピュラの生起率（終助詞あり） 縦軸：対格生起率

以上の結果から、終助詞を伴うコピュラ生起については、いずれの格助詞生起率とのあいだにおいても、片側検定を行った場合であっても、明確な相関関係は確認されなかった。

以上の相関分析の結果から、本研究で用いたデータにおいては、コピュラ生起と格助詞生起とのあいだに、統計的に有意な明確な相関関係は確認することができなかった。いずれの組み合わせについても有意水準 5%には達しておらず、95%信頼区間に 0 が含まれていることから、今回得られた相関係数は、地点数やデータのばらつきによって偶然生じた可能性がある結果であると考えられる。

また、対格において相関がとくに弱かった点については、対格が主格と比べて文中で省略されやすい傾向にあることが影響していると考えられる。そのため、地点全体で集計した生起率とコピュラ生起率とのあいだに、対応関係が現れにくかった可能性がある。このように、先行研究で想定されていたコピュラ生起と格助詞生起の関係は、終助詞がつかない場合の名詞述語文に限定した場合にのみ、部分的に確認されるにとどまり、またその結果も偶然の可能性を排除できないという結果になった。

5-3 他動詞文における主格と対格の相関

前節から、コピュラ生起と格助詞生起のあいだに、先行研究で漠然と想定されていたような対応関係が確実に存在するとは言いがたいことが明らかになった。経済性の原則に基づけば、文中で項標示が明示的に行われる地域ほど、名詞述語文におけるコピュラ標示は抑制される、あるいはその逆の関係が予測される。しかし、本研究で得られた相関分析の結果は、この予測を支持するものではなかった。このように、コピュラと格助詞の関係において経済性の原則が十分に成立していない可能性が示唆される。

この点を、別の角度からさらに確かめることができる。それは他動詞文における主格 (a) と対格 (p) の生起率の関係である。他動詞文における項標示は互いの相互識別を担うという前提が比較的広く共有されている(de Hoop and Malchukov 2008)。言語において強固に経済性の原則が成り立っているのであれば、主格と対格のいずれも格標示するのは無駄であり、「主格か対格のいずれか一方のみが標示される」傾向がみられるはずである。すなわち、両者の生起率は負の相関を示すはずである。仮想の言語体系を用いて説明すると、(7a)のような体系は無駄であり、(7b)か(7c)のように標示する体系が経済的ということである。もちろん、常識や文脈で相互識別可能な場合の方が実際には多いはずで、そのような場合は(7d)のようになることも予測されるだろう。

(7) a. taroo=ga hanako=o mi-ta

太郎=NOM 花子=ACC 見-PST

太郎が花子を見た（筆者作例）

b. taroo=ga hanako mi-ta

太郎=NOM 花子 見-PST

太郎が花子を見た（筆者作例）

c. taroo hanako=o mi-ta

太郎 花子=ACC 見-PST

太郎が花子を見た（筆者作例）

d. taroo hanako mi-ta

太郎 花子 見-PST

太郎が花子を見た（筆者作例）

本研究のデータを用いて主格と対格の標示率に関する相関関係を調べたところ、両者のあいだに $r = 0.62$ という比較的強い正の相関が確認された。検定の結果も有意であり ($p=0.00000413$)、95%CI [0.40, 0.77] と 0 を含まなかった。この相関は偶然によるものではない可能性が高いといえる。

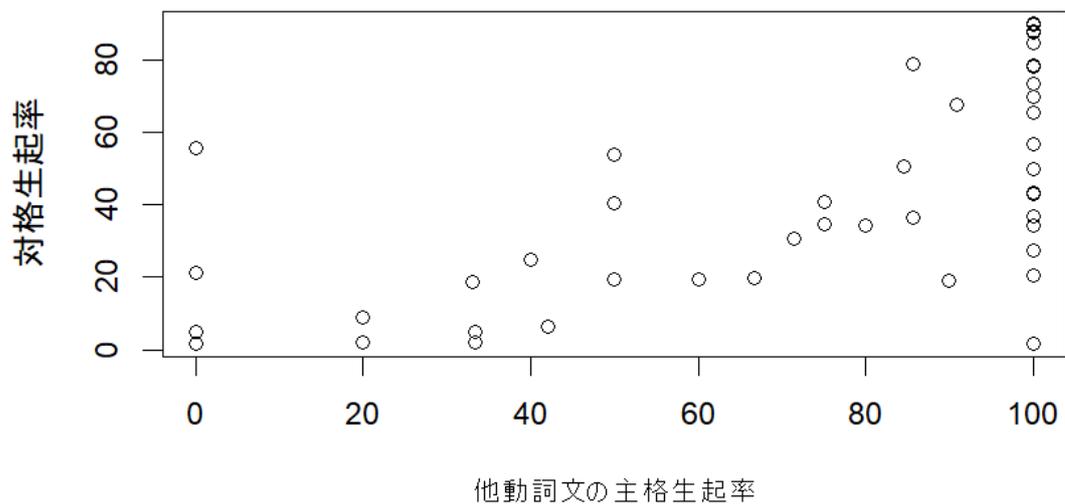


図9 横軸：他動詞文の主格生起率 縦軸：対格生起率

このように、経済性の原則から予測されることと真逆のこと、すなわち主格が生起しやすい地点では対格も生起しやすく、逆に主格が省略されやすい地点では対格も同様に省略されやすい傾向が確認された。

前節で明らかにしたこと、すなわちコピュラ生起率と格助詞生起率のあいだに明確な負の相関関係が確認されなかったことに加え、他動詞文において主格と対格のあいだに比較的強い正の相関が確認されたことから、日本の各地点の方言において、経済性の原則に基づく説明が必ずしも妥当ではない可能性が高いことが明らかになった。少なくとも本研究で用いた談話データに基づく限り、「a を標示する言語は p も標示する傾向にある」という事実は、経済性の原則にとって不都合な事実であるといえる。

6 おわりに

本研究では、日琉諸語における名詞述語文のコピュラ生起と格助詞生起の方言差に注目し、『DDJD_全国方言談話データベース統合版』に収録された47地点の談話データを用いて分析を行った。とくに、名詞述語文におけるコピュラ生起率と、自動詞文・他動詞文における主格および対格の生起率との関係について、相関分析を通じて検討を行った。

まず、名詞述語文におけるコピュラ生起については、日本の東側で生起率が高く、西側、とくに九州北西部の肥筑方言域では生起率が低いという東西差が確認された。この分布は、先行研究で指摘されてきた傾向とおおむね一致しており、終助詞によって文が完結する地域では、コピュラが必ずしも用いられないことを、今回の談話データからも確認することができた。一方で、大分のように周囲の地域とは異なる分布を示す地点も見られ、コピュラ生起の方言差が単純な東西対立では捉えきれないことも明らかになった。

次に、コピュラ生起と格助詞生起との関係について相関分析を行った。まず、終助詞を伴わないコピュラ生起率(copa)と格助詞生起率との関係を見ると、自動詞文の主格とのあいだでは $r = -0.28$ ($p = 0.059$, 95%CI [-0.52, 0.01])、他動詞文の主格とのあいだでは $r = -0.23$ ($p = 0.122$, 95%CI [-0.48, 0.06]) という弱い負の相関が得られた。また、対格とのあいだでは $r = -0.13$ ($p = 0.388$, 95%CI [-0.40, 0.16]) と、相関はさらに弱かった。いずれの組み合わせにおいても、有意水準5%には達しておらず、95%信頼区間に0を含む結果となった。

終助詞を伴うコピュラ生起率(copb)と格助詞生起率とのあいだでは、相関係数はいずれも0に近い値を示した。自動詞文の主格とのあいだでは $r = 0.007$ ($p = 0.961$, 95%CI [-0.28, 0.29])、他動詞文の主格とのあいだでは $r = -0.12$ ($p = 0.412$, 95%CI [-0.40, 0.17])、対格とのあいだでは $r = 0.04$ ($p = 0.804$, 95%CI [-0.25, 0.32]) となり、いずれについても統計的に有意な相関は確認されなかった。

以上の結果から、名詞述語文におけるコピュラ生起と格助詞生起とのあいだには、終助詞の有無にかかわらず、統計的に有意な明確な相関関係は確認されなかったといえる。一方で、他動詞文における主格(a)と対格(p)の生起率のあいだには、 $r = 0.62$ という比較的強い正の相関が確認され、検定結果も有意であった($p = 0.00000413$, 95%CI [0.40, 0.77])。この結果は、主格が生起しやすい地点では対格も同様に生起しやすく、逆に両者がともに省略されやすい地点も存在することを示している。このような分布は、「文中で不要な要素は省略されやすい」とする経済性の原則に基づく予測、すなわち主格と対格のいずれか一方のみが標示されやすくなるという想定とは一致しない。

以上を総合すると、本研究で用いた談話データに基づく限り、日本の各地点の方言において、経済性の原則に基づく説明が必ずしも妥当であるとは言いがたく、コピュラ生起と格助詞生起とのあいだに明確な関係が存在するとは結論づけられない。

上記の結論で締めくくる前に、すでに 5.1 節で述べたように、調査手法についての課題についても言及しておく必要がある。

まず、多くの分析において 95%信頼区間が広くなっており、0 を含む結果が多く見られたという点である。信頼区間が広いということは不確実性が高いということを意味する。標準誤差の大きさに直結する地点数の少なさ (47 地点) や地点間のばらつきの影響を強く受けていると考えられる。

次に、データの独立性に関する問題が挙げられる。本研究では地点を単位として分析を行ったが、地理的に近い地点どうしは、言語的特徴を共有している可能性が高い。そのため、各地点が必ずしも完全に独立したデータであるとは言い切れず、相関分析の前提条件が十分に満たされていなかった可能性がある。この点も、統計的検定の結果に影響を与えていると考えられる。サンプル数を増やした上で空間自己相関分析を行い、地理的近接性を考慮すべきかを検討する必要がある。あるいは、地点をランダム変数にした混合モデルによる分析も有効かもしれない。

今回は、使用した談話資料のデータベースの制約により、このような調査手法を採用することはできなかったが、今後の課題として、地点数を増やし、より適切な統計モデルや検定法に基づいた調査を行う必要があるといえる。

略語リスト

以下は本論文で使用したグロスである。

TOP	主題
COP	コピュラ
SFP	終助詞・文末助詞
NOM	主格
ACC	対格
PST	過去

参照文献

- 白岩・平塚・酒井(2016)「繫辞生起の方言差」『日本語文法』16-2,pp94-110
- 国立国語研究所(1981)『日本言語地図』1,46
- 木部暢子(2016)「対格表現の地域差－助詞ゼロをめぐって－」東京外国語大学語学定例研究会
- 木部暢子(2016)「諸方言コーパスに見る格と取り立て－九州方言を中心に－」「危機言語・方言」研究発表会
- 金城國夫(2023)「大分県豊後大野方言におけるイ主格－意味的・統語的制約（の不在）についての覚書－」別府大学紀要 (64) 93-104
- 方言文法研究会. (n.d). 全国方言文法辞典資料集 活用体系 統合サイト.
- de Hoop, Helen, and Andrej Malchukov. 2008. *Case-marking strategies*. *Linguistic Inquiry* 39(4): 565–587.
- Retrieved January 9, 2026, from <https://hougen.sakura.ne.jp/db/katsuyo.html>
- Shimoji, Michinori (2025). IGT Builder. Zenodo.
<https://doi.org/10.5281/zenodo.16925638>
- Michinori Shimoji(2018) 「Dialects」 Cambridge Handbook of Japanese Linguistics
- R Core Team (2025). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria.